

# 〔命の水〕の大切さを考える

命の源——〈水〉を考える「水シンポジウム IN KSC」が2012年11月16日、カレッジホールで開かれ水にまつわる8人の講演や研究報告に現役、卒業生250人が耳を傾けました（シルバーカレッジ主催・グループ〈わ〉など共催）。この催しは、「生物多様性（2010年）」、「六甲山（2011年）」に続く交流フェアの3回目。  
（まとめ 広報・池田惇、南形徹）

## 「水シンポ」8人が講演

最初に大久保卓也氏（琵琶湖環境科学センター総合解析部門長）が「琵琶湖の水質の長期的変化と流域環境の変化」のテーマで基調講演。「地球の水は無尽蔵ではない。海水をのぞくと利用できる水はわずか。これを農業・工業・生活に利用しているが先進国と途上国とでは利用量にも大きな格差がある。輸入食糧にも水が使われているので、食料自給率の低い日本（40%）は、水の自給率も60%しかない」と前置きし、琵琶湖の水質について報告しました。

「琵琶湖は近畿の水がめとして、これまで汚濁防止・富栄養化防止（窒素・リンの削減）の対策が進められてきた。下水道整備・水田整備・洗堰での水量コントロールなどによって、赤潮は減少し透明度も上がってきたが、一方で、漁獲量の大幅な減少・水草の繁茂・外来生物の侵入（アユなど在来種の減少）などの難題が指摘されるようになった。水清ければ魚すまず、というように水質が良くなったからといって、生物が豊かになるとは限らない。生物多様性の視点から、今後は生態系を重視した多面的な水環境の整備がのぞまれる」と訴えました。このあと、水の効用や水辺の再生などのテーマで、7氏が発表しました。

## 神戸ウォーターを味わう

最後に、全員で「川の流れるように」を歌い散会しました。生環の共通授業だったので、会場は現役・卒業生が大半。水道局から布引の”神戸ウォーター”が提供され、参加者はおいしい水の大切さを実感していました。昼休みにはホールにピアノ演奏が流れ、ロビーでは水に関するパネルやカレッジ学生による写真が展示され、参会者を楽しませてくれました。

### 【研究報告の発表要旨】

▼「水と暮らし～その歴史的発展」松下眞氏（神戸市水道局センター所長）＝古来、「水」と「暮らし」は相互に密接に結びついた存在であり、「水」のないところに「暮らし」は成り立たない。最初は四大文明のように川のほとりで水を使いながら文明を育んできた



が、その後、水を利用する技術が進み、文化や生活のレベルが発達してきた。水の水量調整から灌漑技術が、水の長距離大量輸送のためにローマの水道が、蒸気機関を使ったポンプによる揚水、大量に水を貯蔵するダム建設から大規模土木施設が生まれ、今では、すっかり普及した水洗トイレへと発展してきた。

▼「水と健康」西村典芳氏（神戸夙川学院大学教授）＝「病気になるのも治すのも、長生きするのも、すべてこの世は水しだい」などという人がいるくらい、水と健康は密接な関係にある。地球は水の星、地球の70%が海、つまり「水」で占められており、地球上に住むあらゆる生物、植物などはその恩恵をたくさん受けている。南スラソス・ピレネー山脈の麓にある「トレドの泉」は“飲水治療”で有名な泉で、どんな病気でも治してくれる「奇跡の水」として世界中で評判になり、毎年300万人もの人が訪れるといわれる。このようにヨーロッパを中心に古くから水は病気を防ぎ、治す力があると、信じられてきました。

▼「きれいな水と豊かな水～命育む水づくり」島本信夫氏（NPO法人豊かな森川海を育てる会会長）＝地球は「水の惑星」といわれる。この水のお陰で豊かな生態系が形成され、私たちは水や大気の浄化装置でもある生態系から大きな恩恵を受けて暮らしている。中でも日本は豊富な水資源に恵まれている。高度経済成長期に水質の悪化が進んだが、その後様々な環境対策が講じられ、下水道の普及に伴い水質は大きく改善されてきた。一方で富栄養化が進み、生物の生息環境が変化し魚類などが生息しづらくなったところもある。単にきれいなだけでなく、豊かな生態系を支える「命育む豊かな水」づくりに努めてゆかなければならない。

（写真①＝ロビーで展示された水関係の写真や資料）

# 水 水 水 水……多様な取り組み学ぶ

生環コースコーディネーター 北尾進

今回のシンポジウムは第1回の「生物多様性」、第2回の「六甲山」に続く第3回目の交流フェアとして開催しました。第1回目から「グループわ」の皆様には大変なご協力を頂き心からの感謝を申し上げます。

また、「水写真展」や「シンポ」の受付や記録では生環コースの学生の皆さんも積極的にご協力いただき、まさに学生、卒業生の皆さんが力を合わせて成功させた「シンポ」だったと思います。

今回は、十分な準備ができず、講師の方々や参加いただいた皆様にご迷惑をおかけいたしましたことお詫び申し上げます。にもかかわらず予想を上回る参加者で途中で資料の増し刷りをしたような状況でした。また、参加者アンケートを見ますと74%の方が「とてもよかった」「よかった」とこたえていただき本当にありがたく思っております。

今年、「水」をテーマとしましたのは、世界では安全な水を飲むことができず多くの尊い命が失われて、国連は2005年から2015年を「命のための水：国際行動の10年」と定めて各国での取組を促しています。

一方、私たち神戸市民は度重なる水害や「阪神淡路大震災」で水の怖さや大切さを痛いほど体験したにも関わらず、蛇口をひねればいつでも水を利用できる日常の中で、水のありがたさや大切さ

などを忘れがちになっています。

このような中、私たち人間と水との関係を考える「場」として「水シンポ」を開催しました。

おかげさまでよい講師陣に恵まれ、琵琶湖から海に至る多様な水をめぐるシーンで様々な取組がなされてきていることをつぶさに学ぶことができたと思います。



「イルカと遊ぶ」 水の写真  
応募作品 柏木正 (美19)

水をめぐる問題は、「シンポ」で触れた問題以外にも「産業」「景観」「歴史」など様々な問題があります。今後の課題としたいと思います。

私たち人間も他の生き物も水がないと生きていくことはできません。この水のことをこれからも真剣に考えていく必要があると思います。

これからも「交流フェア」を続け、カレッジを卒業された多くの方々にカレッジに来ていただき、カレッジの学生との交流がこれからも大きく広がっていくことを期待しております。

▼「湧水を次世代に」神戸うまい水探索グループ (KS C生環コース15期生) =神戸の水はうまいといわれる。カレッジのグループ学習で調査した神戸市内外の37か所のきれいな「湧水」について紹介。湧水は環境汚染のバロメーターであり、地域の文化遺産でもある。湧水は災害時の水の確保にとっても、欠くべからざるものだ。湧水は環境学習、観光資源としても大変重要なので、湧水の保全はきわめて大切であり、我々のできることを提言したい。

▼「地域の水辺を再生する」豊田光世氏 (兵庫県立大学講師) =河川整備や自然再生を進めていく際の基本的な考えとして、市民が参加する機会を事業実施のプロセスに組み込むことが重要だ。里山と同じように「里川」の概念の導入を提唱する。流域で暮らす人々が望む川づくりのため、計画段階から積極的な市民参加を求める事業が徐々に増えつつある。水辺再生にかかわるボトムアップの例として佐渡の加茂湖の工事を紹介したい。

▼「雨と災害～六甲山を事例として」神野忠広氏 (六甲砂防事務所長) =雨は水がこの地球上で循環していく過程における一つの形態。雨から多くの恩恵を受けているが、その一方で豪雨などで引き起こされる災害により貴重な生命や財産が失われていることもまた事実だ。六甲山は神戸・阪神地域の象徴であり、住民の憩いの場でもあるが、ひとたび牙をむくと大きな災害を引き起こす可能性を持っている。過去の災害事例を挙げて説明したい。

▼「水の再生と活用」永木郁郎氏 (神戸市建設局東水環境センター長) =下水道は目立たぬ存在であるが、生活環境の改善・浸水の防除・公共用水域の水質保全・下水道資源の活用など、重要な役割をはたしている。神戸市が取り組んできた水の再生、水環境の復活、さらに水の活用の事例を基に、その目的、方法、高度処理技術、効果などを紹介。併せて水の尊さ、自分達ができること、してはならないことを列挙し、今後の方向性について提言したい。